

# 秋田の未来を描いていこう！

主催：地域力フォーラム in あきた2015 実行委員会

## 地域力フォーラム<sup>ちいきりょく</sup> IN あきた WE CREATE OUR FUTURE

2015  
7/12  
(日)

明日の秋田に光りを灯す  
若者6名からの熱いメッセージ

△秋田の未来は△  
こう切りひらく！

コーディネーター  
中島 祥崇さん

松橋拓郎さん（大潟村）  
大潟村松橋ファーム三代目。  
人と人が繋がる農業を目指している。  
農家がつくる日本酒プロジェクト代表

丑田香澄さん（庄城町）  
秋田に「移住相談や土着ベンチャー」として  
奮闘する五城町地域おこし協力隊  
子育て団体共同設立者。

山本瞳さん（八峰町）  
八森底曳漁師のヨメ、  
母として漁業の「おもしりー」  
魚のレシピをブログ等で発信中！

大谷心さん（秋田市）  
地域資源と人、人と人をつなぐ場を  
デザインアートの視点から提案していく団体  
「あらやちやぶちやぶ大学」学長として活躍中。

伊藤晴樹さん（秋田市）  
秋田地域貢献団体ARCグループの創設者。  
地域と学生を繋ぐ架け橋として奮闘中。

奥ちひろさん（横手市）  
秋田型「若者会議」仕掛け人、地域の当事者  
を増やし、若者が活躍できる土壤づくりで  
当事者意識の高い若者を増殖中

基調  
講演



いちむら りょうぞう  
市村良三 氏（長野県上高井郡小布施町長）

講演テーマ「協働と交流のまちづくり」

1973年（昭和48年）慶應義塾大学法学部を卒業後、ソニー（株）を経て、1980年（昭和55年）に株式会社 小布施堂入社。町並み修景事業をはじめまちづくり運動を展開。1994年（平成6年）第3セクターのまちづくり会社「ア・ラ・小布施」の設立に尽力し、

住民主体のまちづくり運動の中心的人物として、栗っこ市や北信濃小布施映画祭、小布施国際音楽祭などの企画イベントや事業を成功させ、「小布施」の名を全国的に一層高めた。2003年（平成15年）内閣府・国土交通省の「観光カリスマ百選」に認定。2005年（平成17年）1月「住民が楽しく生き生きと暮らす魅力ある町づくり」を目指して町長に就任。現在3期目を勤める。内閣府「新しい公共円卓会議」構成員。

「地域力フォーラム in あきた2015」報告書  
地域力フォーラム in あきた2015実行委員会



## 目 次

<b>1 卷頭言</b>	2
蒔田明史（実行委員長）	
菅原歓一（『かがり火』発行人）	
武内伸文（副実行委員長）	
滝本法明（実行委員）	
<b>2 基調講演 「協働と交流のまちづくり」</b>	4
市村良三氏（長野県上高井郡小布施町 町長）	
<b>3 対談 「人づくり、しごとづくり、まちづくり」</b>	7
市村良三氏×菊池まゆみ氏（藤里町社会福祉協議会常務理事）	
<b>4 プрезентーション 「明日の秋田はこう切りひらく！」</b>	9
コーディネーター 中島祥崇	
プレゼンター 丑田香澄 伊藤晴樹 山本瞳	
松橋拓郎 大谷心 奥ちひろ	
<b>5 質疑応答</b>	16
<b>6 アンケート結果</b>	17
<b>7 広報</b>	19
<b>8 開催要綱</b>	20
<b>9 実行委員名簿、協賛者一覧</b>	21
<b>10 交流会の記録</b>	裏表紙

## 1. 卷頭言



### さあ、明るい未来を創り上げよう！

実行委員長 蒔田 明史

ようこそ、地域力フォーラムinあきたへ。今年で3回目の開催となりました。

2年前の第一回フォーラム。私たちはフォーラムの副題に「なまはげ・こまちをこえて」と名付けました。伝統や地域文化の良さをしつかり踏まえた上で、さらに次の一步を踏み出そうという気持ちを込めた命名でした。そして、毎回秋田の様々な分野で奮闘している若者たちに登壇してもらい、彼らの想い、目指すものを語ってもらっていました。3年間で登場したプレゼンター21名、それを聞いてくれた参加者は今年で延べ500人を超えるました。彼らの話は聞いている人たちに感動と活力を与えてくれています。自然環境やそこで生み出される産物、そして人と人とのつながり、そんな地域の特性をしつかりと見つめ、良さを愛した上で、さらに新たな感性を加えて躍動している彼らの姿が人々の心を打つのだろうと思います。

フォーラムをやっていて、このフォーラムを続ける意味は何なのだろうと考えることがあります。このフォーラムは、それ自体で何か新しいことをやろうとしているわけではありません。言わば、単に、頑張っている人たちの話を聞いてもらっているだけです。それでも意味があるとすれば、それは集ってきてくれている人たちが非常に多様だという点にあります。20歳代から70歳代までのマルチ世代からなる実行委員会。興味や取り組む活動の異なる参加者の皆さん。普段は同席しない人たちが集う場で、情報や想いが共有され、そして、個々の活動が複層的に広がっていくための“きっかけ”作りができれば、このフォーラムを続けていく意味は十分にあるのでしょうか。

今年は、長野県小布施町の市村良三町長にお越し頂き、力強いエールを頂きました。

先進事例を学びながら、秋田オリジナルのものも考えていかなければなりません。さあ、なまはげ・こまちを超えて、いや、なまはげ・こまちも共に、新たな未来を創り上げようではありませんか。



### 若者の柔軟な発想が新しい秋田を創る

『かがり火』 菅原 欽一

いま日本の地方における最大の問題は人口減少ということになっています。人口が減少すればなぜ大変なのでしょうか。一般的にいえば、人口が減少すれば生産年齢人口が減る。働く人が少なくなれば生産力は落ちて経済成長が止まる。経済が成長しなければGDPが伸びない。GDPが伸びなければ税収が減る。税収が減れば社会保障も借金の返済もインフラの整備もできない。結果的に国力が落ちて国民は不幸になるという推論のようです。

しかし人口減少は不幸という前提について、私たちはいま立ち止まって考え直してみなければなりません。ここまで地方の衰退が進んだのは、戦後の日本が先進国に追いつくためにひたすら工業化を目指し、そのための労働力を大都市に集中させた結果です。昭和30年代は、子どもたちは「金の卵」とおだてられて故郷を後にしました。故郷に残って親の跡を継いだり、地元に就職した子どもたちは東京に出て行く同級生を屈辱と羨望の視線で見送りました。さすがにバブル崩壊以降、地方は後れているという認識は少なくなりましたが、地方を軽視する風潮はあちこちに残っています。

「地方消滅」にあわてた国は、地方創生の旗印を掲げて全国の市町村に戦略の策定を求めていますが、いささか手遅れの感があります。私は「地方創生」のすべてを否定するつもりはありませんが、国が司令塔となって全国の市町村に号令をかけるシステムは大いに問題があると思っています。中央が事細かにシナリオを書いて、地方に従わせるやりかたには限界があるからです。なぜならGDPと個人の幸せの関係を考えることなく、単純に経済成長に同調していくには、本質的なまちづくりの思想は生まれないからです。

「地域力フォーラムinあきた」は国の政策の延長線上でまちづくりを考えるのではなく、若者の柔軟で大胆な発想で秋田の未来を描くためにスタートしたものです。

フォーラムで発表してくれた若者たちは、ややもすれば保守的で内弁慶といわれる県民性に反して、秋田の未来を積極的に意欲的に語ってくれました。

今年で3回目ですが、このフォーラムはまだ多くの県民に知られているとはいません。回を重ねて、秋田を愛する若者たちがかくも大勢いるということが知られるようになった時、確実に新しい展望が開けるものと思っています。



## 「集結」から「共鳴」へ

副実行委員長 武内 伸文

この地域力フォーラムは、秋田の将来を切り開こうとするパワーが集結する場である。今年で3回目を迎える、様々な分野で活動する21名の若者が、それぞれが思い描く秋田の将来について力強いメッセージを発信してきた。会場には、この地域を何とかしたいと思う参加者が足を運び、プレゼンターの発表に耳を傾け、斬新な発想、卓越した行動力、これまで知らなかつた取り組みに触れることで、それぞれの活動への関心を高めるきっかけとしていた。また、このフォーラムは、多種多様なバックグラウンドを持つ老若男女の実行委員が支えている。将来の秋田を切り開いていく事業を応援したいという共通の熱い思いがエンジンとなり、それぞれの得意分野を發揮しているのが特徴的である。

更に、毎年、秋田の将来に必要なテーマに関する講演をお願いしてきた。これまで「ゆずのブランド化で全国を席捲した愛媛県馬路村」、「離島なのに若者が移住してくる島根県隠岐郡海士町」そして今年は「およそ1万人の町に年間120万人が訪れる長野県小布施町」の先進事例を講演いただき、様々な刺激をいただく機会となっている。

このように、たくさんの地域を思うパワーが集まる地域力フォーラム、これからも是非継続することで、更なるパワーの集結を図っていきたい。ただ、その一方で、更に地域を力強く前進させる上で、それぞれのパワーを共鳴させ、大きなうねりにすることも重要と考える。若者と若者、若者と支援者、秋田と他都市などが「共鳴する環境づくり」が求められる。例えば、「それぞれのゴールについての理解を深める」「お互いの取り組みを経験する」、「異なる分野のマッチング」、「共同のプロジェクトチームをつくる」など、少しずつその可能性を試行していかなければと思う。

これから地域力フォーラムとして、発表の場づくりだけでなく、その先にある将来づくりの伴走者になっていけたらと思うところである。



## 地域力フォーラム実行委員会、応援団はここにいる！

実行委員 滝本 法明

今回、基調講演いただいた市村町長が「このフォーラムのように年輩者が実行委員になって若者の活動を裏側から支えている場をみたことがない」と言っていました。私も当初、先輩たちが自発的に裏方に徹してこのフォーラムを運営している姿に驚きました。実行委員自身がその講演や発表を聴きたくてこの場を設定しますが、裏方は当日もいろいろなことに追われて、じっくり聴くことはできません。それでも、私たちはこのフォーラムを企画・運営し、3回目になりました。

「フォーラムを開催すること自体が目的ではない」

これは実行委員会でよく出る発言です。祭り、自治会、オープンガーデン、まちじゅう図書館、若者会議など地域の元気には「集う場」が不可欠です。このフォーラムも「集う場のひとつになること」「互いに応援し応援される輪を広げること」を目指しています。それぞれの活動を応援しあえるようにメーリングリスト（グループメール）を立ち上げており、フォーラム以外に小さな活動を積み重ねたいという話もよく出ます。

秋田の人口減少率は全国第一位です。過去にこのような人口減少を経験した日本人はいません。これまでの大人たちの「俺の若いころは・・・だった」が、これからは通用しないかもしれません。これまで正しいと思われていたことが、これからも正しいとは限りません。それに、正しいかどうかを考えすぎてしまうと、活動につながりません。自分の意見を持ち、主張することは、活動・成長につながります。私はフォーラムで堂々と発表する登壇者の姿に頼もしさとさわやかさを感じます。今回「生産者でない私ですが・・・」からはじまった山本瞳さんの応援者としての発表から私は「どんな立場の人も秋田の元気に向けて主張できる」と再確認しました。

多くの人に地域力フォーラムや実行委員会に関わってほしいと思います。

立場を越えて応援し合える仲間がここにいます！

## 2. 基調講演



市村良三小布施町長 基調講演要旨

### 「協働」と「交流」のまちづくり

長野県上高井郡小布施町長 市村 良三 氏

#### ●まちづくりの経緯 … プロローグ

小布施町について少し説明しましょう。

面積は5km×4kmの20km<sup>2</sup>に満たない。19.07km<sup>2</sup>です。そこに人口が約11,500人。盆地なので寒暖の差が激しく暮らしにくい。上から見た図でおわかりのようにきれいな扇形をしている。松川の扇状地です。一方が志賀高原という山。山の中を流れてきて平地に出て一気に扇状地になる。

この松川という川の水がよくない。pH(ペーハー)4。強酸性です。生物はなにも住めない。鮎1匹、沢蟹1匹住めない。この川が扇状地を流れている。死の扇状地です。飲み水にならない。従ってこの町の屋号には飲料に適する水を汲んできて売る「水屋」というのが多い。その水を買って料理に使う。

農業用水に使っては米がよく穫れない。この町でどうやって農業で生きてきたか。小布施の人はお金になる物は何でも作った。綿、菜種、ホップ……いろんな物を作った。

しかも作って売るという農業。できればそこに付加価値を付けたい。綿を作ったら糸に紡いで機織りして布にして売る、菜種を作ると油に絞って売る、というように。だから農・工・商が一緒だった。

更にそれを高く買ってくれるところまで持つて行ってどこまでも売った。綿布などは上越(新潟県)あたりが最も多く買ってくれたので、そこに一番持つて行って売った。菜種油は江戸まで運んで売った。今の言葉で言えば付加価値型交易型農業である。それをやらなければ生きてこれなかつた。それが何百年経つた今でも心の中に染みついている。閉鎖的になつたら死んじやうよ。とにかく開く開く開く。外は全部お客様。そういう気持はなんとなく今の私たちにも残っている。それは江戸中期から幕末のころ。そういうことで市が立ち、地域(エリア)の経済的な中心地になった。

その頃、地域に6、7人のリーダーがいた。その方々は経済を発展させただけではなく、この地に文化を根付けさせなければということで、それぞれのリーダーが江戸や京都から文人墨客を沢山招きレベルを高めた。その一人に高井鴻山という人がいて、葛飾北斎もその招きに応じて來た。そして文化遺産である肉筆画を沢山残してくれた。そういう歴史がある。

ところがそういう時代は長くは続かなかつた。明治に入ると町勢が一気に衰えた。それは養蚕、製紙が当時の産業の中心になったが、小布施はあまりうまくいかなかつた。中心は隣の須坂市に移つた。須坂市は明治時代製紙

で栄え、経済の中心は小布施から須坂市へ移つた。その後約100年間小布施は眠りに入った。

#### ●まちづくりの経緯 … 5つのポイント

その後昭和40年代半ば過ぎ頃からいわゆる「まちづくり」が言われ始めた。そのときに当時の町長(私の叔父)が、「この町は果樹を中心とした農業立町で生きよう。もう一つ、先人が残してくれた大変な文化遺産がある。隠し味として文化立町で行こう」という宣言をした。

これは大変なこと。当時は世を挙げて工業立国の時代。それをあえて「農業で行くんだ、文化で行くんだ」と宣言をした。

それに合わせて昭和46年、都市計画として市街化区域の決定をした。開発できるところと農地を守るために開発できないところに区分した。その割合が1:10くらい。1は開発していくが残りの10はあまり開発しないで農地として守つてゆくところ。これはとてもよかつたと思っている。

そんなことからまちづくりが始まったが、まちづくりはまだ當々とやってゆけば成果が出るかと言えばそうではない。なにか情報発信できることをしなければならない。

そのポイントは5つあった。

①人口政策。当時小布施の若者は町を出て行った。それならば新しい人を迎えると宅地を造成し分譲した。これが人気を呼び9,500人を割りそになつた町の人口が2,000人くらい増え、11,000人と今の規模になつた。また、古くからの人と新しい人の融合がうまくゆき、協働して新しいまちづくりをしようというところにつながつていった。また、宅地分譲がうまくいって少しお金が残つた。それを文化立町に使おうと北斎館の建設につながつた。

②北斎館の建設。昭和51年。当時は地方美術館は珍しく画期的だった。北斎は世界的な画家。注目を集め百年振りに町に人が集まるようになつてきつた。

③地場産業…栗菓子の小売り。集まつてくる人の受け皿は地場産業。主として栗菓子だった。小布施は栗。室町時代からあって江戸時代には献上物となるなど知名度があつた。江戸時代末期から明治に掛けて地場産業化し、栗を使って上質なお菓子を作つた。当時砂糖が自由に手に入るようになったが、砂糖は甘味を出す一方、日持ちをさせるという効果がある。それまで家庭菓子であった栗菓子を酒屋とか醤油屋とかそういう資本を持つた方々が参入し一気に立ち上がつた。しかし皮肉なことにそんなとき

に町は衰退。高級菓子のため小売りができずにいたが、北斎館ができたことによって小売りができるようになった。そのときには全国に卸売りしていた長い歴史があつて、和菓子屋はこうだとか、建物は和風にとか、敷地空間はどうあるべきとか、サービスはこうだとかいうノウハウの蓄積があった。お客様が北斎館で名画を見て栗菓子屋でなにかを食べる。そのときに失望感を与えない、一過性にさせないレベルがあった。

④町並修景事業。小布施の町並みは大半が新しいもの。文化的に意義のある建物はない。ただし、少しでも古い物でいい物は残し、できれば伝統的な手法と景観で統一してゆこう。北斎館を皮切りに今では町に13の美術館、博物館がある。また、栗菓子店の活躍は独特の町並みを作っている。町並修景事業として6年かけて今のような町並みを作った。これが評価され、町民の景観意識が高まった。

⑤花のまちづくり。さらに景観を良くするために花で町を作ってゆこう。

この5つがエポックメーキングとして情報発信がなされ知名度が高まり来訪者が増えるようになった。

町並修景には、特徴がいくつかある。①田舎であることを意識していこう。田舎って何だろう。どこでも通れることではないか。人の家であろうが、公道であろうが、自由に通れる。境界をあいまいにしちゃおう。プライバシーなどに捉われるのが田舎のおもしろいところ。②マスタープランはやめ、みんなの話し合いでやろう。2年間話し合いを続けた。③住居地、商業地、工業地の混在性を持とう。こういうことを続けているちにいろんな賞をいただき、町民の景観に対する意識が向上していった。

平成2年、景観条例（「うるおいのある美しいまちづくり条例」）を制定。平成元年のふるさと創生交付金の一部を使って「ヨーロッパ花の町探訪ツアー」を企画した。毎年20人くらいを派遣。10年くらい続いたので200人くらい（大半が主婦）を派遣した。これは勉強になるんですよ。どういう形で生活文化として花を取り入れているか。自分たちの生活をどんなに楽しくさせているかということを知るわけですから。

それから何年かして「ご自慢の庭ができたようですね。オープンガーデンにしてみませんか」という自分の庭をオープンガーデンにする事業を推進した。最初20軒くらいだったが、今は130軒くらい開いている。学校も開いている。オープンするにはエネルギーがいるが、やってみて何が気持ちがいいかというと自分なんですね。それが隣家へとつながってゆく。よい連鎖となって町がきれいになってゆく。

しかし「花のまちづくり」のシンボルがなかった。ちょうど北斎の肉筆画に「巴(ともえ)錦(にしき)」という菊が

あった。200年も前から小布施に伝わる菊で保存会の人たちが非常に大事にしていた。「これだ」ということで3年間かけて毎年6,000本くらい苗を作っていただいて全戸に配布した。仕立てれば立派になる菊ですが露地植えでもよい。きれいな花が町中に咲いている。これが花の町のシンボルになっている。

## ●第2ステージへ … プロローグ

政府主導の大合併に当たり、平成16年2月、小布施は町民の総意により自立を選択した。第2ステージの始まりである。ちょうどその頃（平成17年）私は町長になった。役場に入ってみたら思っていたこととは全然違った。まず財政の健全化、行政改革の2つの健全化に取り組んだ。当時町には年間予算の1.5倍の借金があった。民間だったら潰れている。とにかくやらなければ…。

そのため私は「協働と交流のまちづくりをしてゆきましょう」と、「協働」と「交流」の旗印を掲げた。

協働とは … 4つの協働。①町民との協働、②地場企業との協働、③町外企業との協働（企業誘致とは違う）、④研究機関や大学との協働。

交流とは … 「あんたの町は観光でいいね」とよく言われます。しかし小布施は観光地ではありません。町民は観光という言葉は使わない。農業の町ですから心が触れ合って信頼を得て自分たちが作ったものを直接買っていただくという多彩な交流を通じて地域の活性化、そういう仕組みを作りたい。観光ではなく「町中にぎわいの創出を」です。

また、私が町長になったとき「この町は農業で行く」と再び「農業立町」を宣言しました。農業には無限の可能性がある。小布施の農業は食糧ではない。りんご、ぶどう、桃、梨、栗。これらがなかったら人は死ぬわけではない。つまり、食糧問題には寄与していない。しかも美術工芸品のような立派なものを作っている。これを流通に乗せて開放するのはもったいない。美術工芸品を作ったならば美術工芸品を売るような仕方があるのでないかということですね。

## ●第2ステージへ … 自立（自律）

また、小布施の特徴=強みを生かして自立をと、町の強みを探しました。

そうしたら「町の強み」は結構あるんです。

①町民力が高いこと。協働する力と交流する力が強い。  
②明治22年の町村合併前の16の村の歴史と文化。4km×5kmの町内に昔は村が16あった。今、町内会が20以上あるがそのもとになっている昔の村意識がいまだに生きている。今重要視しているのは町民運動会。毎年10月の連休中に開催している。その時季はお客様で一番混むときで

すが、町=町内会を挙げての一大イベントとしてみんなグランドに集合する。その日は町はてんやわんやです。

③果樹農業によって保全された「農村景観」と「農村のくらし」。小布施は果樹農業ですからビニールハウスも温室もない。みんな露地栽培。このためとにかくきれいです。りんごの花、桃の花、梨の花が4月から5月にかけて一斉に咲く。あるいは秋の実のなるときとか、農村景観がきれいです。また、農村の暮らしも結構守られています。

④町域面積の小ささ。町の真ん中から農村部まで歩いて10分か15分くらい。来訪者にはちょうどいい規模です。

⑤「6次産業」のモデル。そのモデルは昔からあった。どこまで仕立て上げればお客様が付いてきてくれるか。地産地消のモデルとしての地場産業がある。

以上の5点が、来訪者が求める「なつかしい、ホッとする、安らぐ、いやされる」に繋がっている。お客様に触れていただけるノウハウがある。

## ●第2ステージへ … 協働のまちづくり

協働は4つと申し上げた。町民、地場企業、町外企業、研究機関・大学との協働である。

今、東京理科大学など3つの大学と提携している。1つではダメなんですね。先生も学生も安心してしまう。競争してもらわなければならない。領分も違う。また、町外の企業からもお入りいただく。あるいは、町内の企業の立ち上げと地場企業との協働。小布施は農業町ですから農産物とか加工品をいろんなところへ販売に行く。リンゴもぶどうもすばらしいものが穫れる。

しかし、もっと「果樹の町」としてのイメージを作らなければということから、チェリーキッス…これは酸っぱくて食べられないサクランボですが加工するとすごくおいしい。時季になると「チェリーキッスフェア」を開催し、町中の菓子屋、レストランなど30軒の店がフェアに参加し、町を挙げて宣伝する。プラムリーアップル（イギリスリンゴ）も飛び上がるほど酸っぱいがアップルパイなどに加工するとうまい。今では栽培農家30軒、生産量10㌧。これも毎年「プラムリーアップルフェア」を開催している。

こういう違う方向からもう一つのブランド（先兵）として「果樹の町」としてのイメージを作っている。

町外企業との協働としては、

①タカノフルーツパーラー（新宿高野）さん … プラムリーアップルのブランド化に協働していただいており、だんだんとブレークしてきています。

②伊那食品工業さん … 町に170年経った民家があった。行政で引き受けても面白くない。どのように使ってもいいですと伊那食品さんにお願いし、作っていただいたのが「かんてんぱぱショップ小布施店」。立派なショップになって「第二町並修景事業」の中心になっています。

③スーパー・マーケットツルヤさん … 新しいビジネスモデルにしたいということで、景観にうまく溶け込むようないろんな配慮をしていただき、すてきなストアを作っていました。

④JR九州さん … 博多ターミナルにアンテナショップを開いていただいている、九州全土へ農産物を販売しています。

⑤小布施キングスさん … 7年ぐらい前、町を歩いていたら若い人たちにつかりました。「小布施の町づくりは年寄りください。これからはもっと若者向けの町づくりを」と、2時間くらい彼らの話を聞いた。彼らの目的はスノーボードのジャンプ台を作りたいということだった。六甲山に1基あるだけという。今では春から秋まで日本中から若者が集まる。高名なボーダーも練習に来る。これからは若い人が集まらなければ、と理解できました。

⑥ナチュラルアートさん … 全国に農業法人を興してアンテナショップを開設している会社です。「アンテナショップ赤坂小布施町」は赤坂サカスのすぐそばにあります。近くに行ったらぜひお立ち寄りください。

## ●第3ステージへ … 若者の流れを作る

小布施の課題。①農業をどうするか、②若者が足りない。どう流入してもらい、どうやって融合してゆくか。③世代間交流。

若者への流れを作ろう。それには当事者になろうと平成24年から「小布施若者会議」を始めた。これは町が誘致した「日米学生会議」（平成21年8月）が土台になっている。

2年間準備し150人を前提にしたが250人の若者が集まった。今年で4回目。小さな町でやるからこそ発信力がある。それがネットに乗ってハーバード大学がキャッチした。ハーバードで学んでいる日本の大学生が「自分たちが受けているハーバードの初等の高等教育を日本の高校生向けにと2年間東京でサマースクールを開講しているが、地方でやらなければ意味がない。小布施でやらせてくれませんか」と申し出があった。「これだ」と思いましたね。これも3回目になった。50人の高校生が1週間受講します。

## ●終わりに

人間には重層性が必要です。町も同じ。重層性のある町にしたい。いろんな人が関わり合って、面白い楽しい愉快だ、辛いこともあるが頑張れる町に。町自身が重層性を持ち魅力を持つことが重要だと思っています。

ちょうど時間になりました。長い時間ありがとうございました。

### 3. 対談

市村良三小布施町長・菊池まゆみ藤里町社会福祉協議会常務理事対談

## 「人づくり、しごとづくり、まちづくり」

菊池 皆さんこんにちは。市村町長さんの講演のあとですのでかなり緊張しています。市村町長さんにぜひお聞きしたいのですが、今「地方創生」と言われますが、私は福祉の立場からもアプローチしたいと思っています。なぜかといいますと、今まで「まちづくり、仕事づくり」というと、力のある人たちが大きな事業をやって、住民の立場がおいてきぼり。そういう地方創生であるような気がして…。藤里町は高齢化率が40%を超えており、ですから私は高齢者や障害を持っている人でも、だれもが地方創生の仕事づくり、まちづくりに参加できるようであればいいなと思いました。今回「地方創生事業」に手を挙げてみました。そうしましたら総務省から補助金をいただくことができました。役場もバックアップしてくれるということです。そこでなにかお知恵を拝借したいのですが。例えば高齢になってもできることは一杯あると思っています。うちの町は白神山地の麓で山しかないところですが、山の恵み、畑の恵みを生かし切れていない、その恵みを利用してなにか特産品を作りたいと思っているところです。市村町長さんの弱みを強みに変える、物語性を付ける、附加值を付けてゆく、町外企業との連携、研究機関を作ろうというような発想にびっくりしました。その辺のところから町長さんの関わった話など、お教えいただきたいのですが。

市村 今日は菊池さんとお昼から一緒にさせていただいて、ああ、これからは菊池さんから福祉のことをしっかり教えていただきたいなと思いました。菊池さんはすごい賞を受けられて(注: 2014エイボン女性年度賞を吉永小百合さんと同時受賞)、いろんなところからお声がかかるようになったということですが、これはチャンスです。菊池さんは「そんなこと何でもない。吉永小百合さんと比べられても困ります」とおっしゃるが、いいんです。これは少し錯覚された方がいい。私は吉永小百合さんと一緒になんだ

菊池 錯覚ですか。

市村 それでいいんです。そうすると日本中に限りなくお友達ができます。お声をかけてくださったそのお友

達に藤里において一緒に何かやってくれる方を探すことです。

菊池 沢山のお友達を作るということですね。

市村 そうです。藤里へどうぞどうぞといらしていただいて、お年寄りと一緒にできることはなにかありませんか、というようなことをどんどん出していってごらんなさい。どんどんだれでも連れてきて町の高齢の方なんかと一緒にになにかやるというような…。

菊池 言つていいですか。いい意味での「したたかさ」ですか。

市村 「したたかさ」ではないです。裏の裏まで見せると言えます。今の老人クラブなどは一つの団体ですね。その世代の人としか付き合わない。遊ぶための仕組みを作っているんではないか。そうではなくて、私が農業に力を入れるのはお年寄りが「オレ、70過ぎても、80になってもまだ農業やってるんだぜ」と半分不満ですが、半分自慢している。どんな形でも仕事は人間にとって一番重要なこと。福祉という括り(くくり)で片側で見ないで、やはり総合力になって行くことが大切と思う。

菊池 老人クラブが遊びの場になっているとか、デイサービスとかの介護の場面が子供だましみたいなレクリエーションの場になっていますが、デイサービスを受けるようになったからといって全部ダメになっているわけではない。そういう人たちは山菜の始末なんかはすごく上手です。ですから、その人たちもなにか役割りがほしいのではないかと思います。私たち



福祉、介護の現場の関係者が、そういう人たちを何もできない人扱いでやってきた、そういう反省があります。老人クラブさんにも、100%はできないかも知れませんが、2割、3割の力であつたらいろいろな仕事ができます。そういう方向を目指したいと思っているんですけど…。小布施のオープンガーデンを始めるときのお声がけとか、お一人お一人が「自分の庭を見て」というような発想はどこからきているんでしょうか。

市村 田舎であるということを意識することですね。田舎と都会を比べるとき、田舎の強みはプライバシー性が薄いとか、あいまいさとか、権利を主張しないとか、そういうことがある。

菊池 田舎のよさを再発見してゆくということですね。

市村 大半の日本人がここ50年、60年の価値観でモノを考えるようになった、あるいは都会の物差しでモノを考えるようになった、これがまずいんじゃないかな。都会と田舎は本来比べられないもの。「田舎は豊かなんだよ」ということを力強く言ってゆく必要があると思う。例えば朝、家の玄関を開ければそこにはビニール袋が一杯置いてある。名前の書いてあるものもあればないものもある。ありがたいことです。これを田舎の豊かさだと思いますか。そう思うのは浅い。もっと深い豊かさがある。名前の入っていないビニール袋に入っているトマトやりんごやキュウリとかを何の疑いもなく食べれるということの豊かさ。これが豊かさですよ。

菊池 そうですね。

市村 これが都会のマンションの前に置いてあつたら…。そういう尺度で感じてゆくこと。ミニ東京、ミニ大阪そういうものを作つてもしようがない。ここしかできないよというもの。小布施の通り抜けできることなんて大したことではない。今わが家はオープンハウスです。夜中に家に帰れば宴会やってる。わが家のガーデンにはビールを置いている。もともと酒屋ですから…。来訪者が昼から飲んでる。それも疑いなく飲めるでしょう。これが都会のビルの真ん中だったらこわくて飲めないですよね。そういう価値観をよみがえらせてゆくことが地方再生ですよ。本来的にこの町、この村はどうしてゆくんだということをその地域で考えてゆくこと。これに尽きます。

田舎のよさを見直すということは、自分の町のよさを見直してどんどん住みやすく変えてゆく。一つの町づくりなのかなあ、と思いました。うちの町では引きこもりの方々で「白神まいたけキッシュ」を作り始めました。それを町の特産品にしようと作り始め、初年度に450万円売り上げ、今600万円売り上げたんですが、このことで町の人たちの私たちを見る目が違つてきました。「お荷物の厄介者の人たちを支援しているところ」から「あの若者たちは手足が動かないわけではないし、口も自由に動く。若い人たちががんばればそのくらいの売上げは可能なんだ」というイメージが付いてきて、高齢者だって、障害者だって生涯現役を目指したい、という町づくりになってきたんです。市村町長さん、最後に「そうだ、すばらしい、やれやれ」と言ってくださいれば私は町に帰つてうちの佐々木町長に「市村町長さんからエールを贈られた」と言えるんですけど…。ぜひお願ひします。

市村 絶対やった方がいいです。私も本当は引きこもり体質で引きこもりたいんですけどオープンハウスにしますから引きこもってはいられないんですよ。どんな障害のある方でも、なにか力があって、それを保護するとか遊んでもらうとかそういう形ではなくて、社会のために世の中のために人のためになっているんだなあという実感が一番嬉しいことなんですね。専門家としてそういうことでしょう。

菊池 そうです。

市村 すべての住民が生涯現役でという気持でいていただくということが大事なので、福祉だ保護するということでやらないで、一緒に働いてやりましょうという形がいいんではないでしょうか。ぜひやってください。

菊池 「ぜひやってください」というエールをいただきました。ありがとうございました。

## 4. プレゼンテーション

プレゼンテーション

# 「明日の秋田はこう切りひらく！」

コーディネーター 中島 祥崇

プレゼンター

【前半】 丑田香澄 伊藤晴樹 山本瞳

【後半】 松橋拓郎 大谷心 奥ちひろ



## 想いが「調和」する未来を

コーディネーター 中島 祥崇

1年目は参加者として、2年目は実行委員に加えていただき、今年コーディネーターを担当させていただきます中島と申します。昨年コーディネーターの武内さんは「No more 評論家、今こそ行動人 !!」というお話をこの場でしてくださいました。何かのアクションに参加すること、誰かを応援すること。これも立派な「アクション」だと。秋田にも、たくさんの市民活動団体、若い企業家・活動家、活動的な学生が生まれています。この1年でも、その流れは留まる事を知りません。きっとみなさんの中にも「秋田で何か新しい物事が動き出している」実感があるのではないでしょうか? 今年も6名のプレゼンターの方々にお集まりいただきましたが、まだまだご紹介したい方々がたくさんいます。

みなさんひとりひとりのチカラが結びつき、また大きなアクションに進化していく。このフォーラムが、様々な形で生まれたみなさんの想いを繋ぎ合う場になるように、ここから新しいアクションが生まれ出るように心から願い、今年もフォーラムを開催します。

今年、仙北市のわらび劇場では、秋田県民歌、浜辺の歌の作曲者である「成田為三」さんを題材としたミュージカルを上演しております。作品が伝えてくれるメッセージのひとつは「調和」です。それぞれが別のメロディーを奏でていても、重なり合うことで素晴らしいハーモニーをつくことができる。お金持ちも貧乏人も、高齢者も若者も、みんなが調和する。まさに今の秋田に必要なテーマだと思います。たくさんのアクション、メロディーを、ひとつのハーモニーに! そうして創られる秋田の新しい未来が、私は楽しみで仕方ありません。

是非一緒に、この秋田で、素晴らしいハーモニーを創ってまいりましょう!



## 「ワクワク生きる、ワイワイ繋がる」

丑田 香澄

五城目町地域おこし協力隊の丑田香澄です。

協力隊4名、そして活動拠点・馬場目ベース（五城目町地域活性化支援センター）など「チーム五城目」を代表して登壇しています。それは私たちが、個々で頑張るのみならず、民間も行政も協力隊も町民も皆で手を取り合い、共に良い循環を創っていくか？という視点で活動しているから。個人的にも『ワクワク×ワイワイ』というモットーを掲げ、一人一人が自分らしく歩み、その輪の広がりがシナジーを生むと信じて活動しています。秋田出身の私は、消滅可能性都市・自殺率など悲しいニュースの絶えない故郷へ飛び込み、東京での起業経験等を活かしながら、秋田でのワクワク×ワイワイのきっかけ創りに携わりたい！秋田で子育てがしたい！と昨春、一家で移住してきました。

今取り組んでいる課題は一言で「世界トップクラスの少子高齢化が進む秋田を、どう次世代に残すか」ということ。世界一の少子高齢化率が日本、日本一は秋田県、であるならば、いわば秋田は、世界のフロンティア。先進事例として大学院研究対象にされたりもし始めており、そうして着目して頂いている立場も活用しながら、ここ秋田から世界に発信していくけるモデルを！と捉えています。五城目町は人口1万人程度、小中高も1校ずつという、絶好の実験ラボ。五城目だけ良くなれば良いのでは当然なくて、秋田全体、そして日本の地方全体に伝播していくような挑戦ができたら、と活動中です。

目標は、世界ワーストの地から目指す、『世界一子どもが育つ町』。取り組まなければならぬ課題、と捉えるのではなく、ワクワク挑戦したくなるビジョンを自分達で設定しています。

具体的には、

- ◎移住・Uターン支援
- ◎そのための五城目ファンづくり、魅力発信
- ◎地域に根ざした「仕事」「起業※」支援

（※土着ベンチャー：通称ドチャベン）

- ◎町民との協働事業（町の更なる魅力化）

など、若い世代等が移住するためには？そのための仕事は？という視点で活動しています。

実際に暮らす中で五城目の子育て環境は最高だと日々感じていて、世界一！というビジョンも大それたものではないと信じています。自然環境・人の繋がり・自給／贈与／貨幣経済のバランス・放課後子ども教室や学校給食といった既にある豊かな教育環境など、今ある魅力に改めて目を向け、発信し、更なる魅力化を図っていきたい。観光地ではないけれど住むのに最適、という意味で「100万

人が1回ではなく、1万人が100回くる町に」と目標を設定し、目の前の【ご縁】を大切に歩んできた中で、昨年度は4千人近い来訪者が私たちの活動拠点を訪れてくださり、今夏3世帯の移住が決定、新規入居企業1社が入りました。

移住は人生の大決断だからこそ、まずファンになってもらうことは何より大切なこと。来訪してくれた人とじっくり時間を過ごしたり、古民家を活用して仲間が始めた農家民宿・シェアビレッジに宿泊しにきたお客様と町民の方、国際教養大学の留学生がみんなで鍋を囲んで異種混合の団らんをしたり……。ご縁を大切にし、何より私たち自身が日々を楽しむ中で、結果として移住等に繋がってくるのだと感じています。

「良い仕事や稼ぎは田舎に無いからと、せがれを都会に追い出しました」

「若いのに、こんなとこさ来て良いのか？」

などと秋田を諦めがちな声も聞く中で、誇りを取り戻すような活動も重要だと感じています。町民と移住者で共に町の未来を考える場『ごじょうめ朝市大学』の活動等を通して、「暮らす町について、あれもこれも難しいと諦めがちだったけれど、ワクワク妄想を始めた」「この企画をやってみたい』などの嬉しい現象が起き始めています。

仕事を創りながら田舎に移住することが常識になりましたり、そんな起業家により雇用がうまれたからと地元に残る・Uターンする若者が登場したり、そうした動きに刺激を受けて、町民の方が「仕事を創ろう、やりたいことをやろう」と行動を始めたり。地域の住みやすさを、移住者も既存町民も皆で創っていく。そんな、大人も子どももワクワク生きる生態系づくりをしながら、カッコイイ大人たちの背中を見せていけたらと思います。

私たちの挑戦や活動を発信しているフェイスブックページ『こさけ！五城目』も、どうぞご覧の上、応援いただけたら幸いです！

Facebook『こさけ！五城目』

<https://www.facebook.com/CosaqueGojome/>





## 「学生と地域の架け橋」

伊藤 晴樹

消滅可能性都市という言葉を聞いた人も多いと思いますが、改めてこのデータを見てみましょう。このデータが示している通り、私達の住む秋田県は全国で最も消滅可能性都市の割合が多い県です。今、思えば私は高校生の時に自分の住む地域を見つめ直す機会がありました。半数以上の友達が高校を卒業すると同時に県外に出て行ってしまう現状に危機感を持ちました。地元から若者がどんどん流出してしまえば、自分の住んでいる地域はどうなってしまうのだろうか。もしかして、このまま若者の流失が進めば、地域から人がいなくなり、ふるさとがなくなってしまうのではないか。

そう考えたのが高校のときで、それを裏付けるデータが発表されたのは大学生の時でした。やはり地域がなくなると思っていた感覚が本当だったのです。一方で大学生になって気が付いたこともあります。それは県外からの学生が大学進学を機にこの秋田県に来ているということ。様々な地域から学生が秋田県に集まっていることに注目しました。そこで大学生が秋田県に初めて来たときに何が必要なのかを考え、その必要なものを提供できたら秋田に対して良い印象を与えて、秋田のファンが増えるのではないかと考えました。

私が辿り着いた答えはコミュニティ（居場所）です。秋田という地に初めて来た人は今後、上手く人間関係を築くことができるか、この地域で楽しく生活することができるかと考えると思います。そのため、秋田で居場所作りをすることで、その不安を少しは改善できるのではと思いました。

私が学生の居場所としたのは秋田の様々な地域です。人々が暮らすコミュニティに学生を溶け込ませることで、学生に安らげる居場所の提供ができると考えました。

また、学生同士が気軽に集まれるホームとして機能する団体を作る必要があると思い。ARCグループを立ち上げました。このARCグループの説明をします。ロゴに描かれているのはA、R、Cの文字。秋田(Akita)のA、地域(Region)のR、貢献(Contribution)のCの三つの頭文字を組み合わせてARC(アーク)グループと名付けられました。私たちの団体の目的は現地で地域住民から見聞きましたことをもとに、自分たちがこの地域で何ができるのかを模索し、地域活性化に繋げるのが私たちの仕事です。一方で私たちの団体の役割は学生と地域の架け橋になることです。学生が自発的に地域に訪問し、地域は自発的に学生を受け入れる体制を作るための窓口になるのが私たちの団体です。私たちは県内に6か所の拠点があり全

県規模で活動をしています。県北地区では藤里町大沢地域、能代市檜山地域、北秋田市旧大阿仁地域でフィールドワークや地域の祭りへの参加を進め、多くの学生が地域に溶け込んでいます。中央地区では男鹿市安全寺地域などで、地域住民とお米のパッケージデザインを考えるワークショップの実施や田植えや稲刈りに参加しています。県南では美郷町で受け入れ先が決まり、新たなプロジェクトがスタートしています。

また、仕事だけではなくて他県から來た人が県内の魅力に触れることも大切にしていて、県内観光も行っています。気の合う仲間と同じ空間や時間を共有することで、メンバー間の絆を深める機会を作っています。私たちが進めるプロジェクトの活動は大きく3つに分けられます。

一つ目は聞き書きを取り入れた伝承の文書・データ化による文化の保存活動。二つ目は観光ガイドブック・散策マップの作成による地域の情報の発信。三つ目はワークショップや意見交換会の実施による地域の方々との交流をしています。

最後にARCグループの今後の構想についてです。まず、一つは国内外の団体の地域派遣への調整・支援を進めます。実際行った例として日米学生会議という学生団体を藤里町で受け入れていただきました。その際に調整役として関わらせていただきました。二つ目は全県規模の地域間交流の推進です。活動拠点である地域の人々を巻き込み、地域間の交流人口を生み出します。そのきっかけとして観光資源ガイドブックをもとにした町歩きを考えています。三つ目は全県規模の聞き書きによる文化等の保存活動です。拠点の地域の情報を聞き書きを通じて保存し、その対象になる地域を拡大することで広域的な文化的な保存資料ができ、地域の足跡を記録します。今、私たち学生にできることを着実に積み重ねていきたいです。

arcはラテン語で弓を意味するarcusからでき、archは二つのものを繋ぐ弧を表します。私たちのARCも弧を意味するarcを意識して名付けました。空にかかる虹のように学生と地域、地域と地域を繋ぐ架け橋になる団体になるように今後も活動をしていきます。

Facebook『ARCグループ』

<https://www.facebook.com/arcgruuupu/>





## 「Tell forward! 漁業と秋田を伝え育てよう」

山本 瞳

秋田県の最北端、八峰町八森で漁師の嫁をしています、山本瞳と申します。

「Tell forward! 残したい未来を伝えよう」、キーワード一文字を「育」とし、私の活動内容と皆さんへお伝えしたいと思います。

泳げない・さばけない・一次産業に興味がない私がなぜ漁師に嫁ぎ、漁業PRのブログを書くことになったか。理由は三つあります。ひとつは、自分の勉強のため。もうひとつは、将来息子が地元の漁業や魚に興味をもったとき、簡単に調べられるようにするため。そして最後のひとつは、東日本大震災でした。

秋田県、日本海側は奇跡的にも地震や津波の被害は少ないのでしたが、私たち漁業者は約一週間ほど、何の情報もないまま船を出せない状態が続きました。私は、漁業の現場で生きる人達のことをもっとたくさん的人に知ってもらう必要があると感じました。

具体的な活動内容は、「八森よめこ漁業ブログ」ならびにSNSを通して、八森で水揚げされている魚種やそのレシピ、荷揚げの風景をPRする、秋田の伝統魚醤「しょっつる」の販促活動、そしてしょっつるを使った「秋田しょっつるあたりめ」の販売代理などです。おかげさまで一般の読者さんから、「秋田でもこんな魚が揚がっているなんて、知らなかった!」「しょっつるは鍋以外にもいろんな使い方があるとわかった」「漁業が身近になった」と、嬉しい反応をいただいています。

私以外にも、「秋田の地域資源を県内外の人に知ってほしい」「秋田のために貢献したいけどどこから始めれば?」と思っている方はたくさんいらっしゃると思います。そんな方のために、私の取り組んだ三つの方法をご紹介したいと思います。

ひとつは、「自分のやりたいことを周りの人に声を大きくして伝える」こと。私の場合はブログやSNSで自分の考えを表現することで、「それならあの人には会いに行って!」「協力するよ!」と手を差し伸べてくれる人を見つけることができました。

ふたつめに、「お師匠を見つける」ことです。私は、声を出して「協力するよ!」と手をさしのべてくださった人の中から、自分の理想と近いことをしている方、共感できる方を見つけて、勝手に「お師匠」と呼んで、公私ともに学ばせていただいている。私がゼロから編み出したアイデアはほとんどありません。すべては「お師匠」の皆さんのが良いたクニツクを真似て育てていったものです。

三つめに、「自分の土俵をつくる」ことです。この言葉も尊敬する「お師匠」の経営に対する姿勢です。自分の土

俵を作るコツは、「自分の弱み強みを知り、弱みをうまく強みに活かす工夫をする」ことです。プロの漁師や釣り人のブログはたくさんあります。対して私は漁業について何も知らない、漁師でもない素人の嫁です。でも、だからこそ、一般の消費者と同じ気持ちに立って漁業の魅力をわかりやすく伝えることができたのではないかと思います。

最後に、私が思う秋田を表す漢字、そして皆さんにお願いしたいことをお伝えします。

秋田の未来は「育」という漢字一文字で表すことができるでしょう。

秋田県は米どころともいわれるよう農業県、そして今は子どもの学力日本一の県としても知られています。農作物も子どもも「育てる」ことが得意な県なのです。私が尊敬するお師匠たちも、皆自らの知恵を惜しみことなく教え、後輩を育てることのできる人達です。

私のあるお師匠は「人こそが宝」と言いました。そして、誰かを育てることができるというのは、人間の持つ美質の中で最も尊いことだと、私はお師匠たちの背中から確信しました。

秋田はいま、人口減少を皮切りにした様々な問題に直面しています。しかしハード面ばかりにとらわれず、今いる人達を大切に、そしてその内面を大きく育むことを忘れないようにしましょう。

そして、皆さんへのお願いというのは、秋田の漁業についてのことです。秋田の漁業は、「獲る」ことばかりに尽力し、「育む、伝える」ことをおろそかにしてきました。その結果、ハタハタなどの資源枯渇や後継者不足など、厳しい状況に直面しています。私は、これから先も力を注ぐだけの確かな美味しさ、未来に伝えるべき魅力が、日本海秋田の魚にあると思っています。

いま漁業には外からのお知恵が必要です。どうか皆さん、漁業にお知恵を貸してください。私もお師匠から学んだ知恵を皆さんにお貸して、協力できることがきっとあります。そうやって皆で知恵を共有し、秋田の未来を育んでいきましょう。





## 「人と人が繋がる農業」

松橋 拓郎

私たち大潟村松橋ファームでは、売り上げの多くは米ですが、その他にも約30種類の野菜や大豆、酒米も栽培しています。コンセプトは「人と人が繋がる農業」で、農業を通してコミュニティを形成することを目指しています。作る人(生産者)と食べる人(お客様)の直接的な繋がりが大切であると言われて久しく、その縦の繋がりは全国的に珍しくなくなってきたと思いますが、食べる人同士の横の繋がりはどうなっているのか、というのが私たちの問題意識です。様々なプロジェクトやイベントを通して、農業を中心として食べる人同士の横の繋がりを作ることを目指しています。そして、作る人と食べる人の直接的な繋がりに限らずその間に伝える人(小売店・飲食店など)に入つもらうことにより、その伝える人と直接繋がっている、食べる人を介して強固なコミュニティを形成していくことも重要だと考えています。このコンセプトを具現化するために行っていることのうち、特に力を入れている2つを紹介させていただきます。

一つ目は、「農家がつくる日本酒プロジェクト」です。このプロジェクトは、酒米の種から日本酒ができるそれを飲むまでの過程を通して人と人が繋がることを目的としています。そして、「自分たちの」日本酒を作るというような主体性を参加者に持つてもらえるよう努めています。酒米を栽培する大潟村松橋ファーム、日本酒を製造する福禄寿酒造、酒販免許をもとに日本酒の販売を担う(有)ダイサン、プロジェクトのプロデュースを行う(一社)つむぎやの4者で運営しています。具体的なプロジェクト内容は次の通りです。

- ・酒米が生産され日本酒になる過程の体験や見学
- ・ブログやFacebookページでの生育状況の発信
- ・自分たちの日本酒に名前をつける(初年度のみ)
- ・交流会の開催
- ・瓶の裏ラベルにコースオーナーのお名前掲載
- ・自分たちの日本酒を飲むためのお猪口作り

次に、プロジェクト発足から今までの経緯をご紹介させていただきます。2012年の9月にプロジェクトのキックオフパーティーを行い、この段階でオーナーの募集を開始し、交流会も開催し始めました。2012年に初めての交流会を行った際、お店は満席となり、その時に挨拶をしてくださった福禄寿酒造の渡邊社長より、「酒が無いどころか、まだ酒米の種すら播いていないのに人が集まる意味が分からない」という名言が出ました。このことで、私たちのコンセプトに自信を持つことができました。体験イベントは酒米の種まき・田植え・稻刈りに加えて夏は体験する作業がほとんど無いので、稻の生育を確認してもらっ

た後に夏野菜の収穫とBBQを行っています。これに日本酒完成直後の酒蔵見学と搾りたて試飲の計5回です。希望者が参加することができます。また、楽しさも大切にしているので、陶器やガラスなどのお猪口作りの体験も行っています。また、実際の作業を体験してもらいたいので、手植えや手刈りなどではなく、実際に田植え機やコンバインに乗つもらっています。3年間を通して東京と秋田で交流会も行ってきました。そして、日本酒完成後には完成披露パーティーを行い皆で日本酒の完成を祝い私たちの日本酒を飲みます。

初年度はオーナーになってくださった方々の応募の中からオーナーで投票を行い私たちの日本酒の名前を「農釀」(のうじょう)と決めました。

2つ目のご紹介させていただくのは「シェアビレッジプロジェクト」です。五城目町の町村集落にある築133年の古民家が取り壊されようとしているのを知った仲間たちが始めたプロジェクトです。決して安くない古民家の維持費を皆でシェアしようという仕組みで、会員のことを「村民」、会費のことを「年貢」と呼び、村民を募りました。

「村があるから村民がいるのではなく、村民がいるから村ができる」というコンセプトのもとに村の概念をひっくり返すプロジェクトです。この「シェアビレッジ町村」は農家民宿としても開業していて、私は農家民宿や農業に関する部門を担当しています。村民になると宿泊することができ、シェアビレッジに足を運ぶことを「里帰」と呼んでいます。秋田から遠くてなかなか里帰りできないという方々のために主に都市部などで「寄合」いう交流会を定期的に開催しています。寄合で村民同士が繋がり、東京と秋田の寄合をwebで繋ぐという試みも行われました。宿泊したり、村でいろいろなことを体験したり、関わってもらうことを通して、「自分の村」という主体性を持ったコミュニティをつくっていきたいと思っています。





## 「アートのチカラ、学生のチカラ」

大谷 心

私のプレゼンのテーマであるデザインとアートと地域づくり。それに関係するあらやちゃぶちやぶ大学（通称ちやぶ大）を紹介します。ちやぶ大とは、秋田市新屋にある昔から親しまれてきた水資源を、現代の私たちも親しめるよう、デザインやアートの視点から活用方法を提案し実行する、地域密着型の非営利団体です。

主な活動は、おそうじちやぶ、新屋カルピス・フレーバーウォーターの販売、ちやぶはたけ、ナツナガシ、なべっこ遠足、あったかちやぶがあります。ちやぶ大の活動により、新屋の様々なことが変わろうとしています。おそうじちやぶ、ナツナガシの開催場所である新屋大川端帶状近隣公園は平成10年に親水公園として整備されました。それまでは、工場排水を流すところだったため「汚い」というイメージから子供に遊ばれることのない場所になっていました。子供が水路に入らないことと、水路を流れる水に沢山の鉄分が含まれていたことにより、異臭を放つ水路になっていました。水路に入って、ちやぶちやぶ楽しみながらお掃除をすることで、水路がきれいになり、「汚い」「入ってはいけない」というイメージがなくなるのではないか…そう考えた初代代表松浦が立ち上りました。1ヶ月に3回の頻度でお掃除をしました。すると、徐々に新屋の小学生が参加してくれるようになりました。「おそうじちやぶ」を実施するようになって以来、親子がせせらぎ水路で遊ぶ姿が見られるようになりました。

変わったのはそれだけではありません。今年度、せせらぎ水路を流れる水が湧き水になりました。変わった理由は、「頑張って掃除してくれているのに、このままでは綺麗にならない」という地域の方々の思いから秋田市と水道局が動き、湧水が変わりました。

変わっているのはそれだけではありません。新屋では「鹿嶋まつりPRイベント」と「水祭り」が開催されるようになりました。もともと新屋にはたくさんの湧き水や地下水があり、畑や洗濯に使われていました。豊富な水資源があるものの、うまく資源として活用できていないのが現状にありました。新屋の水を資源としてお金に変える。それが、「新屋カルピス・フレーバーウォーターの販売」です。ただの水に価値をつけ販売し、新屋の人の自信に変えていきました。「何も無い新屋」が「水資源の豊富な新屋」に変わりつつあります。

学生が地域に入ると「学生なんかに何ができるんだ」と地域の方に言われることがよくあります。本当に何もできない学生でしょうか。「学生なんかに何ができるんだ」と言わると腹がたつし非常に悲しい気分になります。とても傷つくのです。しかし、そんなことで傷つかなくて

いいのです。これはチャンスです。何ができるんだと思っているということはゼロからのスタートではありません。マイナスからのスタートです。普通の人が100点取ると、私たちが100点取るとでは価値が違うのです。このマイナス分の付加価値がつくのです。マイナス分だけ付加価値になります。それに学生ですから失敗しても学生だから仕方ない。と思ってもらえるわけです。マイナスも全部プラスにすればいいのです。

学生は、いいように、無料でなんでもやってくれる労働力として扱われることもあります。しかし、そこで怒っても何もいいことはありません。代表やリーダーのような役割の人であれば余計そうです。そんな時に、そこにあるものと自分の持っているものでどれだけその場所を空間を楽しくできるかが大切です。道化ではありません。パフォーマンスです。

それは地域活性化にも言えます。地域資源とは言い難いものでも地域資源にし、物語と付加価値を与える。そうすることで、地域の人が地域資源に気づき、地域にお金が少しづつ落ちるようになります。ちやぶ大は、新屋カルピスとフレーバーウォーターでそのことをやっています。値段を上げると「ぼったくりだ」とか「原価が云々」とかいう人が必ずいます。なぜ値段を上げる必要があるのか。それは、地域の方の自信につなげるためです。「なにもないと感じていたのにこんな値段で売れた」というものは地域の方の自信につながります。その後押しをするのがデザインとアートです。高くてもときめきや感動を得た時に購買意欲が出るのです。その魔法を、私たちがかけます。まだまだ勉強中で、できないこともたくさんあります。でも秋田が大好きなのは誰にも負けません。これから沢山のことを学び、秋田に魔法をかけたいと思っています。時間はかかるかもしれません、どうか宜しくお願いします。





# 秋田発！新しい交流と活躍が生まれる場

～若者会議が地域を変える～

奥 ちひろ

プレゼンテーション

高校時代、わたしは地元を離れたい一心で県外の大学に進学した。なんとなく地元での暮らしに息苦しさを感じていたからだ。しかし、いざ離れて実感したのは、いかに自分が地域に育てられてきたかということだった。それは、自分を語るときにはいつも必ず秋田出身であることを語っていた自身の姿からも明らかだった。県外に出て、比較することができて初めて地元の良さが分かった。しかし、同時に県外の人に知られている秋田の情報は乏しく、県内にいる友人から聞こえてくる話題やニュースは暗いものばかりだった。調べてみると秋田にはワースト上位となるデータが多く、全国でいち早く進む少子高齢化の影響によって様々な地域課題が増えていることを知った。

「なんとかしなきゃ、秋田が滅びる！」そんな漠然とした気持ちで、大学卒業後は地元に帰ることを決めた。

幸運にも現在の職場で働かせて頂くことができたが、そこで感じたのは違和感だった。地元に危機感を持って帰ってきた自分に対して、その気持ちを共有できる同年代はほとんどいなかった。首都圏では、学生でも20代の社会人でも市民活動に携わる人がいたのに、秋田では若者と地域との間に距離があり、市民活動といえば高齢者が余暇活動としてやるもの、偉い人や特別な人がやるものだと思われている節があった。2015年、日本創成会議は「消滅可能性都市」について発表し、県内では25市町村中24市町村の自治体が機能しなくなると伝えている。そんな中で、これからこのまちで生きていく私たちのような若手世代が、自分の住むまちを自分たちのまちとして考え、話し合い、行動していくことが必要だと思う。そこで若者を地域の当事者と捉え、若者の「地域のためになにかやりたい」という想いを育て、形にしていく仕組みの必要性を秋田県に提案し、2009年、国の基金を使って秋田型「若者会議」をスタートさせた。

この取り組みによって、参加した若者が変わってきた。これまで地域について考えたこともなかったという人が地元のために取り組むようになったり、都会志向だった人は地元にあるもの良さに気づいてそれを活かそうと考えるようになったりした。また、様々な年齢や職業、性別の参加者の中で、異なる考え方を持つ他者を受け入れ、お互いの良さを活かして共に励もうとするようになった。

「自分にも地域や誰かのためになれる」と自信につながった人もいた。同年代がいない職場の中で孤立していた人や、家と職場との往復で生活に張り合いがなかったという人の中には、共にがんばれる仲間が見つかったことで職場や地域に定着したり、自分のやりたいことを見つけられたという人もいる。このような場はこれまでになく、

参加者は「若者会議」の場づくりを自分たちで継続しようと取り組んでいる。若者を受け入れた地域が活性するなどの波及効果もあった。

この取り組みは全県各地に広がり、参加メンバーによる全県ネットワークができたことで可視化され、「若者支援先進地」として県外から注目されるようになった。視察やインターンシップの受け入れを行わせて頂き、秋田型の「若者会議」を地域に持ち帰って取り組み始めたところもある。このほか、小布施型の「若者会議」のように若者の力を活かす場が全国に広がっており、2013年12月には僭越ながら横手市で全国大会を開き、他県で「若者会議」を行っている方々にも事例発表をして頂いた。

発見したことも多かった。現代の若者は地域や職場の中で孤立しており、地域から姿が見えなくなっているということや、若者のコミュニティを把握している機関がなく、マイノリティの存在になっていることなどだ。

そんなふうに広がってきた「若者会議」だが、課題も多い。元々地域での活動経験がない参加者は自分たちで活動を継続しようとしているものの、事務局機能やコーディネーターの存在がなければ難しい状況がある。ライフステージが変化しがちだという若者層の特性もあり、また、新たな若者の掘り起しと育成が必要なことから、若者の努力による自主運営だけでは仕組みの維持は難しいように感じる。若者の潜在的な想いや力を引き出し、活躍できる仕掛けを続けていく必要があるが、支援の必要性への理解がなかなか進まないこともまた悩みの一つだ。

今後はメンバー同士が育ちあう循環型の仕組みをつくると共に、コーディネーターを増やしたい。その一環として、7月から9月の日程でファシリテーション勉強会を開催する。ぜひ多くの方に参加してほしい。



## 5. 質疑応答

### ● 丑田さんへ

Q. 「BABAME BASE」の魅力や今後の可能性、そして他の地域でも同様の取り組みができるかどうかの可能性について聞きたい。

A. 「BABAME BASE」の魅力については、まず一度きてみてください！五城目の中でも大自然の、田舎の中にあるところで、本当に素晴らしいロケーションにあります。都会で狭いオフィスで働いた経験のある身からすると、こんなに贅沢な景色を味わいながら、この広い教室を使いたい放題ということが信じられない。このロケーションだけで移住を決めた家族が2組いますし、そこで起業しようと決めた人たちがいるという、魅力に溢れる場所。ここでみなさんにお会いできたのもご縁だと思っています。まずはひ一度遊びにいらしていただきたいなと思います。平日日中は比較的いるし、事前に連絡もらえばぜひご案内させていただきたいと思っています。

今後の可能性については、可能性しかないと思っている。先程心さんのお話で、女性に対する期待値が低いからこそ、周囲の期待を越えることができる、というお話をおもしろく聞いていました。五城目も同じ。田舎でありながら、土着ベンチャーの聖地をつくるということに対し、本当にできるのか？という期待値が低いからこそ、可能性に溢れているし、地域おこし協力隊という制度は日本全国にありますが、それぞれ自治体により定義が異なりますが、五城目にいる4人は全員起業してここに入ろうと思っているので、変化にも溢れた「BABAME BASE」にぜひいらしていただきたい。他地域の展開については、まずは五城目でしっかりと事例を固めたいと思っています。

### ● 伊藤さんへ

Q. 大学院終了後は、どこでなにをやりますか？ 後継者はいますか？

A. 県内の知り合いの会社に就職内定をいただいているので、県内に残ろうと思っている。一旦企業に入り、起業のノウハウを学んでから、秋田で土着ベンチャーが立てられるようにスキルアップをしていきたいと思っています。

後継者についてですが、実は今日が最後の仕事でした。私は初代の代表で、2代目の代表に明日から引き継ぎます。しっかりと後継者もおります。現在140名学生が集まっています、8割秋大生ですが、県内5大学からメンバーは集まっています。ですので次の代表が任期を終えても、バトンをつないでいってくれると思っております。

### ● 山本さんへ

Q. 一般の人が「漁師体験」をできる機会はありますか？

A. 体験に比べて秋田県の漁業、漁協は一般の方にあまり開かれていないのが現状です。小学生の体験学習等の受け入れはありますが、気軽に一般の方が体験できる体制が整っていません。色々と手続きが煩雑もあります。でもそこを変えないと、地元の人が漁業に興味を持ってくれないなと思っています。ですがわたしの家、個人ベースで、少人数から受け入れをはじめたいと思っていて、海外の「ウーフ」というプログラムがあり、今勉強中です。簡単な作業、荷揚げを手伝ったりとか、選別をしたりとかをしていただいて、その御礼にお魚を使用したごはんを提供するといったもので、取り組みたいと考えています。レビューを募集しておりますので、興味のある方はぜひご連絡ください。

### ● 松橋さんへ

Q. 次はどこの地域で村づくりをしますか？ 構想はありますか？

A. 我々の中では構想はありますが、まだ公開できません。ものすごく「北」、ものすごく「南」の地域ではない、ということはお話しできます。シェアビレッジのホームページ、フェイスブックページがありますので、そちらで随時、情報をチェックしていただければと思います。

### ● 大谷さんへ

Q. 大人もおそうじに参加してもいいですか？

A. 新屋ちゃん、大学には、メンバーにも大人の方が2名いらっしゃいます。お掃除にも参加していただいて大いじょうぶです。もしよろしければ、お子様と一緒に参加していただけると、とても嬉しいです！日程等はホームページ、もしくはフェイスブックで随時更新しておりますので、よろしくお願いします。

### ● 奥さんへ

Q. 若者の中には社会活動に参加することに「抵抗感」がある人もいると思うが、どうすればそういうものをなくせると思いますか？

A. まずは活動者が楽しむことが一番と思っています。わたしも若者会議にお誘いするときに「こんなにすごいことしているから」とか「こんな地域活動をしてるからどうですか？」というような説明方はしていません。ほとんどの場合、まずは楽しいものがあるからどう？というくらいで、ハードルを高く感じさせないような説明方をしています。声のかけ方ひとつでイメージも変わってくるのかなと思っています。

## 6. アンケート結果

### 1. 基調講演について

(回答数:36名)

#### 【よかつた、感動した】

- ・小布施町はたくさんの弱みを強みに変えることで、よい地域づくりができたことがよくわかった。
- ・町民をはじめ県外の大学で、企業を巻き込むストーリーが非常におもしろいと感じた。
- ・7、8年前に小布施に行ったことがある。常に前を見て先に進んでいることに感動した。
- ・気になっていた小布施町の話を聞くことができて大変良かった。いろいろヒントになった。
- ・思いだけでなく、論理的に分析をしていて、さすがだと思った。
- ・基調講演は大変参考になった。小さな町でもできることがまだたくさんあると感じた。
- ・若者会議やまちづくりで有名な小布施町長の興味深い話が聞けて良かった。
- ・とても興味深く、わかりやすくてよかったです。
- ・大変参考になった。
- ・小布施町の存在を本日知った。町の写真、素敵ですね。
- ・ずっと気になっていた小布施の話を聞いて良かった。
- ・大変参考になることが多かった。
- ・力の入ったとても良い報告だった。
- ・小布施の取り組みを聞いて良かった。
- ・初めて聞く話で大変刺激的だった。
- ・遠路、忙しい中の来県に感謝します。
- ・とても楽しかった。また来ます！

#### 【秋田のこととして】

- ・小布施の強みは秋田県と共に通するところが多いと思う。秋田の農業を始め、自然や伝統産業、多種多様な仕事につきながら個々ははじめに取り組んでいるので、それらを活かしたいと思う。今ある問題の解決策のためには、専門家や外部の力が必要なので、いかに繋がり、協力を得られるかが大切だと思う。
- ・町長として当然の働きやアイディアであるが、それが特別視されることが日本の問題。講演を聞くだけではテレビ視聴と変わりない。秋田でも地域力は上がってきていると思うが、それをまとめるサイト、場所が機能していないと思う。いろいろな地域力を一目で見られる(知ることができる)場が必要。たとえば有機野菜、誰が作っているか、どこで買えるか。頑張っている若い農家さんのものを利用したい。小さな喫茶店がたくさんできているが皆が共有できる情報があればいい。秋田の良いところは、原発の無いところ、

東京から遠いところ、人数が減らないよう頑張るってとてもマイナスイメージ。少しでもいる人が楽しければそれでいいんだって前向きなイメージが大切と思う。少ないというが、適正人口があると思う。今まで多すぎたのではないか。お互いの顔がわかる、災害に危険などころに住まなくていいなど秋田は良いところだと思う。頑張っている人はたくさんいる。それを繋げるのは秋田の怠慢なのではないかと思う。

- ・秋田は秋田なりの取り組みが必要だと思った。

#### 【自分のこととして】

- ・「道」の整備について話を聞き「道」の文化について調べたくなった。
- ・観光地であえて『観光』を仕事にして、起業予定。観光地だからこそ大事にしなければいけないもの(心のつながり)の再発見、まちの人とのつながりの大変さ、まちづくり=人とつながり活かし活かされることの大変さを知りました。
- ・「すべての価値観の再構築」。自分を含めて子ども、家族、知人、周りの人の価値観の再構築が必要なこと、すべてに刺激を受けて、知ること、変わることが大切だと思った。
- ・秋田県を残したいならば、規制や年にとらわれず打破することがポイントだと思った。誰がやってくれるんだろうという意識は捨て去るべき時期であると感じた。市町村長の力が大きいと思うが皆で取り組んで行けたらと思った。
- ・やる気が増した。

#### 【小布施町に行ってみたい】

- ・小布施町の町民主体の図書館づくりを知って、小布施町に行ってみたいと思っていたので、この講演を聞き、ますます実際にに行ってみたくなった。「交流」を町民が来訪者とともに楽しめる町は、本当に素敵だ。
- ・小布施町に行ってみたくなった。

#### 【その他】

- ・ある意味、変わったアプローチの地域活性化だと思った。
- ・物事を覚えるのは、理屈よりセンスであると痛感。
- ・トップの気づきの大変さを強く感じた。
- ・ポジティブシンキングな町民が羨ましい。
- ・町長の話は「結果」だけでなく「経緯」が聞きたかった。
- ・対談の時間はもう少しあるとよかったです。

### 2. プрезентーションについて

#### 【すばらしい・期待している】

- ・若いエネルギーを感じた。私たちの年代からは孫のようにかわいい人たちです。何より若い言葉で素直に話していると思う。
- ・6人の話がおもしろかった。
- ・丑田さん、お話をうまい。ワクワク、ワイワイ最高! AIUとの交流、素晴らしい。
- ・行動力、実力に驚き、こうした若者がたくさん増殖し、秋田がどんどん元気に、若者が笑顔で住めるようにしたいと感じた。
- ・前向きの若者がいることが大変嬉しく感じた。
- ・地元のやる気を感じて安心した。
- ・秋田のために頑張っている若者がいることを誇りに思う。
- ・私も県外へ行って「秋田がピンチ」と知って秋田市へ戻ってきた。同じ者同志心強い。同じ若者として、県内にはこんなに心強い

仲間がいるんだと励まされた。

- ・実践的地域活動に感銘した。
- ・とてもパワーを感じた。全員が楽しそうであったのが印象的だった。
- ・すばらしい活躍だ。
- ・とてもエネルギーを感じた。
- ・アイディアとパワー、そして熱い想いに感動した。
- ・いろいろな面で悩みながら進んでいるのだと非常に共感した。これからももっとおもしろいことを打ち出して行って欲しい。
- ・同世代の方が、これから明るい秋田をつくるため、様々な活動をしていることを知って、刺激を貰った。
- ・秋田の若者が元気だということをわかつて良かった。
- ・実際に行動しているうえでのメッセージで、とても力強く感じる。

### 【自分も行動したい】

- ・皆とてもエネルギーで活動的だと改めて思った。私もその輪の中に入り、更に広がっていきたい。
- ・非常に志のある方々が集まっており、心強く感じた。自分自身も若者として情報発信をしていきたい。
- ・地元に残る覚悟を決めた人の力を感じ、自分も応援だけでなく実践者の1人でありたい。
- ・自分も当事者になりたい。
- ・今まででは、他の人が作ったコミュニティが企画に乗っかることが多かったように思う。だから小さなことから自分発の“何か”を発信していきたいと思った。
- ・今まで知らなかった活動・取組み、そこから生まれる効果を知ることができた。県内で身近に活動しているので、大変参考になった。自分の周囲に広めたいと思う。こんな仲間がいたら明るい秋田になると思う。話は本当に楽しかった。
- ・「価値観、再構築」頑張ります。
- ・大学生としゃべってみたい。私の地域にも来てください。女性たち、元気があっておもしろい！松橋さんもおもしろい。
- ・私にもできることがあるかもしれないと思った。

### 【プレゼンがすばらしい】

- ・皆さんプレゼンがとても上手で、聞きやすくて感動した。
- ・ほとんどの方が、秋田以外で何年かを過ごした方で、言葉にとても説得力があった。

### 【支援したい・見守りたい】

- ・大いにすすんでアタックして欲しい。見守りたいと思う。
- ・できれば支援したい。
- ・若者の知恵と行動力はすごいと思った。思いが繋がり地域が豊かになることに協力したい。
- ・とても頼もしいと思った。是非応援したいと思う。全県に広まり、県全体の底上げになる活動がいくつでも生まれてくれたらいい。

### 【その他】

- ・6名の発表は素晴らしかったが、その先のビジョンが見えないと思った。
- ・プレゼンテーション能力がすごい人が多く、このような方々に秋田を発信する力を委ねたいと思った。

## 3. フォーラム全体について

### 【よかった】

- ・すごく良かったと思う。
- ・本当に来てよかった。
- ・感動した。
- ・こんな人が集まっていて驚いた。秋田で真剣に未来を考えている方が多くてうれしいです。
- ・秋田以外の人も参加していて、力強いと感じてくれたようだ。
- ・地域に根差した仕事をするにあたって、たくさん頭を耕された。また新しいこういったフォーラムに参加させていただきたい。
- ・活気があって良いのでは？
- ・プレゼン、楽しかった。もう少し長い時間聞いてみたいと思った。
- ・内容は満足した。
- ・いろいろな方が様々な形で参加、支援されていてとてもいいフォーラムだと思った。
- ・初参加ですが楽しめた。
- ・有料のフォーラムにこれだけ来場というのはすばらしいと思う。
- ・今回おもしやがった！みんな話が上手！講師に呼びたい。
- ・初参加だったが、どちらかというとネガティブな印象の秋田の将来について、明るい兆しを感じることができてとても良かった。現状を“チャンス”として活かせるかどうか、問われていると改めて感じさせられた。
- ・秋田の将来について、希望を持つことができた。元気になれた。

### 【参考にしたい】

- ・これから農業で頑張っていこうと考えている私にとって、たくさんのヒントを得られたと思う。
- ・プレゼンターの皆さんのが発表がとても上手でした。参考にしたい。
- ・毎回来ているが大変参考になる。
- ・教育とは変わること！考え方、行動を変えられそうです。
- ・大変参考になった。
- ・プレゼンターの方にとっても、参加者にとっても、たくさんきっかけが落ちている時間になった。

### 【聞かせたい】

- ・長いようで充実した時間になりました。多くの若い人にも聞かせてあげたい。特に高校生に。

### 【その他】

- ・交流の時間も含めて、時間が短く残念だ。
- ・対談の時間はもう少しあるとよかったです。

### 【つながりの大切さ】

- ・一つひとつの活動同士のつながりを生めるようなフォーラムであった。
- ・個々の力には限界があるので、周囲とつながり協力を得ることが大切だと思った。秋田の魅力にたくさん気づかされた。

## 4. 来年以降のリクエスト

### 【プレゼン】

- ・若い人たちの時間をしっかりと取れるといい。
- ・プレゼンター一人ひとりの時間を長くしてほしい。
- ・輝いている若者をどんどんクローズアップしてください。

### 【ゲスト・基調講演について】

- ・元小浜市(福井県)市長、村上利夫氏の講演を聞きたい。
- ・地域づくりに先進的に取り組んでいる自治体の首長の講演。
- ・とても良い企画だ。地域の大学なども巻き込めると良い。
- ・秋田で頑張っている若い人にスポットを当てて、応援することは大切だと思う。新しい取り組みをしている人材をどんどん発掘していただきたい。

### 【テーマ】

- ・つらい人が治るテーマ
- ・“地方消滅”が話題だが、日本や東北、秋田の未来について予測を交えて議論してはいかがか。
- ・若い女性議員。女性がどんどん立候補したくなるような話を聞きたい。
- ・18歳の若者を秋田から出さないフォーラムにして欲しいです。
- ・一度県外に行って秋田に戻ってきた人の知識を語っていただく集まりをして欲しい。
- ・医療・介護等にも拝げて欲しい。

### 【支援のシステムが欲しい】

- ・マネーの虎みたいに金銭的に応援したい人の受皿があるといいかもと思った。
- ・ここで発表してくれた人々を支援するシステムを作り、協力者につなげていけるようにして欲しい。また、参加者に企業の人々も入り、次に繋がっていく場になって欲しい。

### 【進行等について】

- ・もっとQ&Aの時間があればよかった。
- ・次はワークショップ方式、またはフロアとの対話がしたい。
- ・参加者同士のワークショップがあっても良いかと思う。
- ・握手会を是非。ひとり一言交わせると思う。
- ・より幅広い層にもっと繋がりが広がるように、義務ではなく、進んで参加できるような形式があったらと思う。
- ・フォーラムの場でもっと参加者と発表者が関わることができる工夫や、参加者同士の交流を図る工夫が欲しい。
- ・一人ひとりの方のお話をもう少しゆっくり聞けたら良かった。
- ・時間がぎりぎりだった。もう少し長くてもいいから話をもっと聞きたい。

### 【その他】

- ・来年もスケジュールに入れて参加したいと思う。
- ・大いに企画楽しみにしています。
- ・是非来年も参加したい。
- ・スペース、会場的に可能であれば、メモをするスペースがあると助かる。

## フォーラムをどのように知りましたか?

(複数回答可)

①新聞	0
②雑誌	0
③ラジオ	0
④チラシ	12
⑤ポスター	2
⑥知人	20
⑦その他	12 (内 FaceBook 9 ネット 2)



## 8. 開催要綱

### 「地域力フォーラム inあきた」開催要項 ～We create our future～

#### 1. 趣旨・目的

急速な人口減少やそれに伴う高齢化の進行、厳しい経済状況などややもすれば秋田県の未来は暗いと危惧されることが多い。しかし本当に秋田の未来は暗いのだろうか。秋田にも地域を愛し、地域で生きることに誇りをもち、様々な分野で前向きに頑張っている若者がたくさんいる。

本フォーラムは、そうした若者たちにスポットをあて、その想いを共有し、共に語りあうことで、秋田の魅力や秋田で暮らす楽しさを再発見し、年齢や立場を超えて力を合わせて秋田の明るい未来を切りひらくことを目的として開催するものである。(一昨年より本年で3回目の開催となる)

#### 2. 主 催

「地域力フォーラムinあきた2015」実行委員会

#### 3. 共 催(別記)

#### 4. テーマ

We create our future

#### 5. 開催日時

平成27年7月12日(日)

受付12:00 開会13:00

#### 6. 会 場

秋田県ゆとり生活創造センター遊学舎

(〒010-1403 秋田市上北手荒巻字堺切24-2)

#### 7. 定 員 150名

#### 8. 参加費

一般 1,000円 学生 500円

#### 9. お申し込み

- ・チラシ裏面の「参加申込書」によりFAXまたは郵送にてお申し込み下さい。
- ・メールでの申込み…メールアドレス (ffakita@gmail.com) に、①氏名、②住所、③電話番号、  
④一般・学生の別、⑤申し込み区分(フォーラムに参加、交流会に参加)を明記してお申し込み下さい。
- ・申込書に記載された個人情報はセミナーの運営管理以外には使用しません。

#### 10. 申込み締切

- ・定員になり次第締め切れます。

#### 11. プログラム

- |       |  |
|-------|--|
| 12:30 | 開場   |
| 13:00 | オープニング<br>副実行委員長 武内伸文                            |
| 13:15 | 基調講演 「協働と交流のまちづくり」<br>長野県上高井郡小布施町 町長 市村良三氏       |
| 14:30 | 対談<br>市村良三氏×菊池まゆみ氏<br>(藤里町社会福祉協議会常務理事)           |
| 15:00 | 若者6名からの熱いメッセージ<br>丑田香澄 伊藤晴樹 山本瞳<br>松橋拓郎 大谷心 奥ちひろ |
| 16:45 | クロージング<br>実行委員長 蒔田明史                             |
| 17:00 | アフタートーク(発表者との交流タイム)                              |

#### 12. 事務局

- ・NPO法人あきたパートナーシップ

申込書郵送先: 〒010-1403

秋田市上北手荒巻字堺切24-2

申込みFAX番号: 018-829-5803

申込みメールアドレス: ffakita@gmail.com

#### ※共催団体(五十音順)

- ・ARCグループ
- ・アート大町実行委員会
- ・秋田県南NPOセンター
- ・秋田県立大学森林科学研究室
- ・あきた地域資源ネットワーク
- ・あきた地球環境会議
- ・あきたデザインサポート
- ・あきたデザインネットワーク
- ・あきたパートナーシップ
- ・秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会
- ・秋田バリアフリーネットワーク
- ・秋田森の会・風のハーモニー
- ・あらやぢやぶぢやぶ大学
- ・かもあおさ笑楽校
- ・心といのちを考える会
- ・子育てカフェにこりーふ
- ・自然工房「北の風」
- ・SiNG
- ・ひだまりファーム
- ・ヒューマンネットワークマガジン「かがり火」
- ・ふじさと元氣塾
- ・まちおこしNPOオモシエナ
- ・株式会社わらび座
- ・NPO法人Yokotter

## 9. 実行委員名簿、協賛者一覧

実行委員名簿（「あいうえお」順・敬称略）

No.	氏名	住所	備考
1	浅野慎太郎	仙北市	26年度発表者
2	鎧 啓記	秋田市	
3	石岡真理子	秋田市	26年度発表者
4	石黒 承子	秋田市	
5	石沢 真貴	秋田市	
6	板谷 大樹	八峰町	26年度発表者
7	伊藤 真由	秋田市	26・27年度総合司会
8	大石美和子	秋田市	
9	大井セツ子	由利本荘市	
10	大井 益二	由利本荘市	
11	鎌田 洋平	秋田市	
12	熊谷 朋子	秋田市	
13	櫻庭 遊	秋田市	
14	齋藤 寛之	秋田市	
15	佐藤 喬	東成瀬村	26年度発表者
16	東海林拓郎	秋田市	
17	菅原 香織	秋田市	
18	菅原 歓一	東久留米市	発起人・アドバイザー
19	菅原 梯祐	秋田市	
20	菅原 展子	秋田市	事務局
21	鈴木 和浩	北秋田市	26年度発表者
22	鈴木志都子	秋田市	
23	閑 徹彌	秋田市	会計
24	多賀糸敏雄	横手市	
25	高杉 静子	秋田市	事務局
26	高橋 基	横手市	26年度発表者
27	滝本 法明	秋田市	企画
28	武内 伸文	秋田市	副実行委員長
29	寺田 俊夫	秋田市	
30	豊巻 真也	横手市	
31	中島 祥崇	仙北市	コーディネーター
32	袴田 俊英	藤里町	
33	畠山 順子	秋田市	事務局
34	福岡真理子	秋田市	
35	本間 綾	秋田市	
36	蒔田 明史	秋田市	実行委員長
37	吉田 理紗	秋田市	26年度発表者
38	山本 瞳	八峰町	27年度発表者
39	大谷 心	秋田市	27年度発表者
40	伊藤 晴樹	秋田市	27年度発表者
41	奥 ちひろ	横手市	27年度発表者
42	松橋 拓郎	大潟村	27年度発表者
43	丑田 香澄	五城目町	27年度発表者

## 協賛広告社・協賛者（ご寄付者）一覧

### I 協賛廣告社(順不同)

No.	事業所名	市町村名
1	寺田内科医院 様	秋田市
2	秋田ホーチキ株式会社 様	"
3	関社会保険労務士事務所 様	"
4	ナベシマ 様	"
5	矢島保育園 様	由利本荘市
6	佐々木内科循環器科医院 様	秋田市
7	菅原内科クリニック 様	"
8	株式会社丸幸 様	横手市
9	NPO法人あきたパートナーシップ 様	秋田市
10	NPO法人あきたスキッチファンド 様	"
11	一般社団法人あきた地球環境会議 様	"
12	ウインドベル 様	"
13	武内印刷株式会社 様	"
14	KOMABA 様	"
15	株式会社みちのくテレコム 様	"
16	社会福祉法人伯仁会 様	大仙市
17	山二システムサービス株式会社 様	秋田市
18	合同会社かがり火 様	千代田区
19	しのハ 様	秋田市
20	ガーデンファームさしなべ(藤原由美子)様	由利本荘市
21	むつみ造園土木 様	秋田市

## II 協賛者（ご寄付者）（順不同）

No.	ご 芳 名	市 町 村 名
1	伊藤 真由 様	秋 田 市
2	森 栄子 様	上 田 市
3	藤谷 智義 様	秋 田 市
4	高橋 浩二 様	"
5	佐藤 嘉一 様	"
6	岡崎真理子 様	"
7	志立 正仁 様	"
8	秋田産業サポートクラブ(首藤健次様他) 様	東 京 都
9	佐藤 忠次 様	秋 田 市
10	田口 良実 様	"
11	菅原 梯祐 様	"
12	(株)アイネックス 様	"
13	中島 結也 様	"
計13名		
総計34件		



## 10. 交流会の記録



～交流会～

「秋田があるさ」を大合唱!!

フォーラム終了後、恒例となった大町「あくら」での大交流会。

吉田さん、齊藤さんの名司会が、

抜群の衣装とトークで、開場を楽しい雰囲気に包みこんだ。

更に、美味しいお酒や料理で、参加者同士の交流が進む。

恒例となった豪華協賛品をかけたじゃんけん大会でもボルテージが上がり、

最後には、参加者全員で輪をつくり、肩を組み、

「明日があるさ」の替え歌「秋田があるさ」を全員で大合唱。

若い僕には夢がある いつかきっと いつかきっと わかってくれるだろう

秋田がある 秋田がある 秋田があるさ ♪